

ニュースの壁

北海道釧路湖陵高等学校2年 山上 彩夏

「韓国は反日の人ばかりなんだよ。」「韓国の授業では日本のことを悪いようにしか言わないんだって。」これは、私が韓国について最初に知ったことである。



私は高校で外国語部に所属している。今年の11月に、外務省が行っている「対日理解促進プログラム」JENESYS2018 韓国青少年訪日団」を利用して外国語部で1週間韓国に行った。このプログラムは韓国の高校の生徒と授業を受けたりホームステイをしたり、韓国の伝統・文化について学び日韓の交流を深めるというものだ。

私にとって初めての海外であり、もちろん初めての韓国でもあった。私は韓国で過ごす1週間のことを考えて期待を日に日に募らせていった。出発が近づいてきたとき、ニュースで日韓関係について報道していた。その内容は決して良いものではなかった。そのニュースでは韓国人が日本のことを悪く言っていたり、デモを行ったりという内容であった。その中でも特に目立った言葉は、「反日」だった。そして、私は少し「反日」という言葉が引っかかったまま出かけることになった。

韓国の高校を訪れた時、私は知らずと身構えていたと思う。なぜならあの時の言葉が引っかかっていたからだ。訪れてまず行われたのは、歓迎式。講堂に足を踏み入れると、目の前にはたくさんの生徒と、聞いたことのないほどの歓声だった。私はこの一瞬で心に引っかかっていた何かが消えた。初めて会った外国人、それにまだ一言も話していない、声も聞いていない私をこんなにも歓迎してくれる人がいる。それだけで私は心の底から嬉しかった。その後、学校の廊下を歩いていけば日本語で「こんにちは」と笑顔で挨拶をしてくれた。一度だけではなく何度も。私も慣れない韓国語で「アンニョンハセヨ」と返す。もうその頃には何とも言えない温かさによってあの言葉の存在はかき消されていた。

私は帰国してから改めて考えた。「ニュースの内容は本当に真実を伝えていたのか。」と。正直、私は少しの間しか韓国にいなかったし、関わった人も少ない。だから、はっきりしたことは言えない。でも、一つだけ自信を持って言えることがある。それは、直接目で見て、聞いて、感じないことには何も分からないということだ。人から聞いた情報だけですべてを決めつけてしまうと、その印象だけですべては決まる。もちろん、その情報の中には正しいものもあるだろう。それに、日本をあり良い国だとは思っていない人は少なからずいると思う。でも、それはほんの一部だ。ニュースは本当に悪いところだけを取り上げていると思ってしまった。その時、私は思った。自分自身が見た・聞いた・感じたことを信じるのが一番だと。そして、ニュースの壁を壊せるのは自分自身しかいないと。

全くその通りです。メディアは真実を伝えていません。SNSも信用はできません。自分の目で見て考え、何が正しいのかを判断出来るようになりますよ！



「過干渉育児」の恐ろしい弊害 子育ては根気が一番

【先回りし過ぎ？ これからは「カーリング→見守り」育児 特集】(1)子どもの成長を阻害する一番の要因とは？ 教育心理の専門家とアドラー心理学者に聞く

子どものやることなすことすべてに口出ししたり、手出ししたりしていませんか？ よかれと思ってやっているかもしれませんが、実はそれこそが子どもの成長する機会を奪い、自立して生きていく力を育むことの阻害要因になっているかもしれないのです。

この特集では、子どもに対する過干渉育児を「カーリング育児」と定義し、そこから脱却するための様々なノウハウをご紹介します。第1回は、教育・心理関係の著書が100冊を超える、明治大学文学部の諸富祥彦教授と、ベストセラー『嫌われる勇気』（ダイヤモンド社）の共著者で、アドラー心理学者・哲学者の岸見一郎さんに、「カーリング育児」がもたらす弊害について話を聞きました。

過干渉育児は子どもの主体性を損なう

子どもって、手がかかる生き物——。そんなふうに思っていないですか？ 実際問題、そうかもしれません。自分で朝起きることもできない、ごはんを作って、

自分で食べることもできない。洗顔も歯磨きも着替えも、靴を履くことすら、私がやってあげている…。そんなご家庭もあるのではないのでしょうか。

「親は子どものためと思ってやっているかもしれませんが、結果として子どものやる気や自主性、自立心、能力開発の機会まで奪ってしまっていることに気付いていません。子どもは何もかも親がやってあげなければいけない存在ではないのです」 こう語るのは、明治大学文学部教授で、『ひとりっ子の育て方』（WAVE出版）など教育・心理関係の著書が100冊を超える、諸富祥彦さんです。

「2020年の教育改革などでも、『主体性のある学び』の大切さを訴えています。親がなんでもやってしまう過干渉育児は、まさにその主体性がない子どもを育ててしまっているのです。本来、自己選択することこそが人生のはず。過干渉で育てられた子どもは、大人になっても自分で職場も結婚相手も何も決められない、自分の頭で物事を考えられない人間になってしまう、そんな恐ろしいリスクがあるのです」 それでは、子どもをほったらかしにすればいいのでしょうか？ 諸富教授は「それも間違っている」と続けます。

親が見守ってくれているから、子どもは安心して遊べる

「子どもになんでもかんでも手出し口出しするのはやめてくださいと言うと、なぜか全く子どもに関わらなくなってしまう極端な人もいます。過干渉がダメならば無関心（ネグレクト）になるというのは、大きな勘違いです。

では親はどうすべきなのか。子どもには“一人で遊ぶ力”がもともと備わっているのだから、子どもが遊んでいるのをただ見守ってあげればいいのです。こう言うと、またスマホをいじりながら、全く子どものことを見なくなってしまう人が多いのですが、それではいけません。子どもは一人で遊んでいるように見えても、時々親が自分のことを見ているか、確認しています。そのとき、親が自分のことを見守ってくれていると感じると、安心して、また自分の遊びの世界に戻っていけるのです」

余計な手出し、口出しをせず、子どもがすることをじっと見守る。言葉にすると簡単ですが、これができている人は実はごく少数ではないでしょうか。忙しい共働きのママ・パパは、少しでも空き時間があれば、あれをしよう、これをしよう、あくせく動いてしまいます。そうではなく、じっと子どもがやっていることを見守って、子どもが失敗しようが何をしようが自由に遊ばせる。「子育ては根気が一番大事」と諸富教授は指摘します。

「欧米人の親は、例えば子どもがパン屋で好きなパンを選ぼうとしているとき、どんなにかかっても子どもの決断をじっと待ちます。ところが日本人の親は待ちきれず、すぐ『これにしたらいんじゃない？』などと、自分の都合で選ばせたりしてしまいます。これでは子どもの“自分の人生を自分で決めて、自立して生きていく力”は育ちません。誰もが『共働きで忙しいから』『待っている時間がないから』と言い訳しますが、共働きなのは海外の親も同じ。子どもにかかる時間の使い方が、日本と欧米では違うように思います」

本当に勇気が要る「見守り育児」

アドラー心理学を広く認知させるきっかけとなった大ベストセラー『嫌われる勇気』の共著者、岸見一郎さんも、過干渉育児に警鐘を鳴らす一人です。

「子どもがやることを先回りして、手出し口出しするほうが、親としては実は楽なのです。色々注意して、言うことを聞かせたほうが育児をした気になるからです。

あえて手出し口出しせず、見守るという選択をするほうが、勇気が要る行為です。周りから、『あの人は子どもの面倒をちゃんとみない親だ』などと後ろ指をさされるかもしれません。でもそんな声に耳を傾ける必要はないのです。子ども自身が『これをやろう』と決意し、自ら動き出すのを待つ。そして親は子どもに指示してやらせるのではなく、子どもがやろうとしていることを援助する。そうすることによって、子どもは自立し、自分で生きていく力を育むのです」

手出し口出ししないといっても、命に関わるようなケガをしそうなときや、誰かを傷付けてしまいそうなときは「ダメ！」と注意しなくてはならないと、諸富教授も岸見さんも声をそろえます。

「見守る」とは、裏を返せば“いつでも出ていけるように用意しておく”ことでもあります。子どもの行動に意識を向けず、スマホばかり見ていたら、子どもが危ない場面に遭遇したときに、ぱっと俊敏に動くことはできないはず（岸見さん）

この特集では、子ども自身がすべきことやぶつかる障害などを親が先回りして片付けたり、排除したりしてしまう育児を、氷上でストーンを滑らせるスポーツになぞらえて「カーリング育児」と定義しました。子どもが自分で対処すべきことに対して、ストーンの前の氷をブラシで掃くように、先回りしていませんか？

日経 DUAL